

アイヌの治療法と沖縄の精神治療について研究報告会

7月9(土)、10(日)の2日にわたり、東京六本木の国際文化会館にて当財団主催の第16回研究報告会が開催された。主題は「民俗医療の再検討——北海道と沖縄の研究事例を中心に——」というもの。第1日は「アイヌの疾病と治療法」「沖縄の精神治療」について研究報告とコメントが行われ、第2日はこれらの報告を受けて「民俗医療研究の現代的意味と今後の研究課題」と題する討論が行われた。(概要 P.3 参照)

特殊な学際的なテーマだけにどのような人がどれ位集まるかと心配していたが、各新聞社が案内記事を出して下さったためもあって、多分野にわたる熱心な方々が定員を越えて参加された。ただ、時間の都合で演者とフロアとのやりとりが十分行われなかったのは残念であった。また、2日目の討論は小人数で密度の高い議論をと考え、出席者を30人に制限したため多くの希望者をお断りすることとなった。お許しいただきたい。

第3回研究コンクールの公募準備進む

——10月15日より公募開始——

昭和54年度に財団設立5周年を記念して始まった“身近な環境をみつめよう”と題する研究コンクールは、その後も隔年に実施することとなり、この10月には第3回の公募を開始することとなった。

このコンクールは、日常生活との係わりの深い身近な環境を対象として、その地域に生活する人と専門の研究者とが共同し、長期的な地域密着型の研究活動を推進することを目的としたものである。今回は「環境」の概念をより広くとらえ、人間の内面的な問題も対象としたいと応募要項を検討中である。また、環境を受身でみつめるだけでなく、みつめる中からより望ましい環境を創造していくという、積極的な姿勢をもった研究活動を重視したいと考えている。

詳しい要項は次号の財団レポートでお知らせする予定ですが、関心をおもちの方は10月1日以降、電話でお問い合わせ下さい。

“身近な環境”みつめてますか？

—第1回研究コンクール・受賞チームの現地インタビュー—



第2回研究コンクールでは、昨年秋に全国から12のチームが研究奨励賞に選ばれ、各チームは以後、2ヶ年にわたる研究を開始した。この夏は後期の活動への折り返し点として、どの研究チームも観察・観測や討論にと余念のないことと思われる。

この時期、財団では選考委員の先生方に各研究の現場を訪ねていただき、研究チームのインタビューをお願いした。

左の写真は気仙沼市十八鳴浜でのインタビューの情景である。十八鳴浜研究会では鳴浜の保護を目指して年4回海浜の測量を行っている。この日も炎天下の測量が行われ、合間合間に数々のアイデアや夢が語り合われた。



助成活動のすゝめ方

トヨタ財団 事務局長 山口日出夫

ことしの研究助成の選考も終盤にむかいつゝある。昨年より申請件数が120件も多く、海外からの申請の増えたことが、話題のひとつである。そしてひきつゞき第3回の研究コンクールの募集がはじまる。

ことしの申請増加の原因は海外から増えたこと以外に厳しい財政状態を反映している面もあるだろう。研究助成の申請にも極めて敏感に社会現象が投影されるのをかいまみる思いである。

海外からの申請が多くなったのは、本年度の募集にあたり、応募要項を海外の日本研究関連機関約 500に送付したことによる。従来から当財団では研究チームの構成や研究テーマの内容、研究対象地域など何らかの点で日本と関係のあるものであれば、外国人の申請をうけつけていた。たゞし申請書は日本語で書いて下さいとしている。ことしはごく簡単な案内をしたにすぎず徒労に終ることを心配していたが、海外及び外国人からの申請は59件に達している。従来からこの種の申請は若干はあったわけだから、今回の申請すべてが募集方法を変更したこと起因するとはいゝ難いが、反響のよさには感心させられる。

海外からの申請には日本の研究者とは全く異なる発想によるものが散見されそれだけでも、興味のわくところである。

昨年度、あたらしい研究種別として第I種研究を設け若手研究者への奨励的見地からする助成を開始した。これにより若手研究者への助成が大巾に増えたことはいうまでもないが、予想外のごとくは在日外国人への助成が3件あったことである。教育・文化領域の第I種研究助成9件のうち3件であったから高い割合を占めたことになる。在日外国人の研究者が、研究助成をうけるチャンスは一般的には少ないので、このシステムはよい効果をもたらした。これは従来からトヨタ財団が国際性を標榜し、国籍の如何を問うていなかったのと、あたらしい第I種研究がうまく結びついたからといえる。

海外への募集といい第I種研究の新設といいあたらしい企てが、確実な手応えを見せてくれることを知ることが出来る。

助成財団の役割は、社会が常に若くあるための“触媒”といわれている。助成活動を通じてその役割を実現させるためには財団自体の柔軟な体制、柔軟な思考が必要であるが、そのうえで手をうてば、反応は必ず出てくる。

財団の研究助成はサッカーのゲームでいうとバックがフォワードにパスを出すのに似ている。バックから出す球のタイミングがよいか悪いか先づ問題になる。タイミングのほかに出す場所が問題である。待ちかまえているフォワードの足元にきちっとした球を出すのか、それともオープンスペースへ球を蹴り出し、フォワードを思い切り走らせるのか。いづれにしる戦局を見極めフォワードの能力も考えながらよい球を出さねばならぬ。それによって局面が変わること必至である。

社会が常に若くあるための“触媒”として球を出そうとするなら、オープンスペースへ球を出し可能性を思い切りひき出すのがよい。そこからゲームは予期しない好結果をもたらすものである。

たとえば54年以来隔年に実施している研究コンクール“身近な環境をみつめよう”である。このプログラムによりそれぞれの地域に密着した興味深いテーマが生まれた。そしてそれを推進する研究メンバーは実に多彩な顔ぶれであった。たとえば中・高校の生徒、家庭の主婦、専門の研究者という組み合わせである。もしこの研究コンクールがなければ、多分生れなかったに違いない。

そして5年目を迎えた“隣人をよく知ろう”プログラムである。東南アジアの図書を翻訳出版助成するプログラムであるが、このプログラムの中心になる仕事に図書の選択がある。一国の文化を伝える図書の選択の仕事はいくくしてたいへん難しい仕事であるが、すべて現地の人達を中心にしておこなわれている。“隣人をよく知りたい”という私たちの願望にこたえて“もっとよく知ってほしい”という現地の人達の協力がかみあって、このプログラムは順調に進行している。アジア物は売れないという定説をくつがえすまでには到らないが、数多くの図書が出版され、東南アジアの国々に対する新しい認識が生まれ、さらに相互理解のチャンスが生まれる。

このように見てくると財団活動によって投げられた一石は、様々な波紋を描き、そして新しい動きをつくる。

この新しい動きが、これからの社会に必要とされるものを生み出すに違いない。そう確信しながら財団活動に取組みたいと思う。



第16回研究報告会「民俗医療の再検討—北海道と沖縄の研究事例を中心に」

冒頭の記事でも紹介したように、去る7月9・10日の2日間にわたり、第16回研究報告会が行われた。この報告と討論の全容はいずれ何らかの形で活字にしたと検討中であるが、ここで簡単にその概要だけをお伝えしたい。なお、当日配布のレジュメをご希望の方は240円切手を同封の上、財団事務局にお申しこみいただきたい。

☆ ☆ ☆

第1部 アイヌの疾病と治療法

北海道立衛生研究所の木下良裕氏と北海道開拓記念館の藤村久和氏は、昭和52年度以降、130人にのぼるアイヌの古老を訪ね、アイヌの疾病と治療法についての入念な聴き取り調査を続けてきた。その調査の一部を藤村氏からは「疾病観と治療観」を中心に、木下氏からは「治療法と治療薬」を中心に報告いただいた。

これらの報告に対し、これまで文献を通じてアイヌ医療史を研究してこられた北方史料研究会の谷澤尚一氏と、日本の医史学について研究をしてこられた順天堂大学医学部の酒井シヅ氏からコメントをいただいた。司会は長年地域医療の問題にとり組んでこられた筑波大学社会医学系の小町喜男氏である。

第2部 沖縄の信仰治療

東北大学文学部の大橋英寿氏は、沖縄の本部町で精神病院を開設している高石利博氏との共同により、昭和55年以来、沖縄の精神病治療におけるユタ（シャ



第3部 討論風景

ーマン)の役割について地域社会の内面にまで立ち入った研究を続けてきた。第2部はその報告であり、高石氏からは沖縄における精神病治療の現状、特に「医者半分ユタ半分」という状況について、大橋氏からはユタが行う精神病治療の実態や患者のユタ依存度について報告があった。

これに対し、宗教人類学の立場からシャーマニズムの研究をしてこられた駒沢大学文学部の佐々木宏幹氏と、精神科の医師でありかつて沖縄の離島で調査体験をもつ角館総合病院の久場政博氏からコメントが行われた。司会は医療人類学のパイオニアである聖心女子大学の吉田禎吾氏である。

第3部 民俗医療研究の現代的意味と今後の研究課題

前日の研究報告を受け、これらを今後どう展開すべきかについての討論が翌日第3部として行われた。

小町・吉田両氏からまず第1・2部の研究報告と討論について総括報告が行われ、続いて当財団の理事でもあり医療情報システム開発センターの理事長でもある大島正光氏より「現代医療の立場から」と題して話題提供があった。続いて同氏の司会により参会者の意見交換が行われた。民俗医療はそのままでは現代医療を越える有効性はないものの、現代医療が見失ったあるいはまだ気づいていない多くのものを含んでおり、そのような観点からの研究が必要なが確認されたように思う。

(山岡記)

第2部研究報告 演壇はコメントの佐々木宏幹氏





自立化する東南アジアと日本

トヨタ財団国際助成活動の一考察

法政大学教授 鈴木佑司

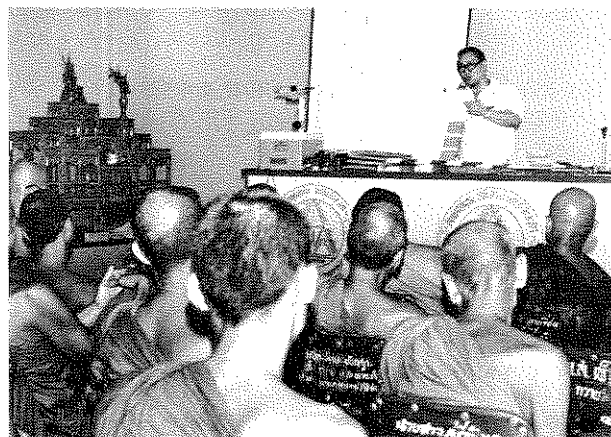
※トヨタ財団は来年10周年を迎えるにあたり、今まで行って来た国際的なプログラム活動に関する評価を、昨年より法政大学の鈴木佑司教授にお願いしてまいりました。評価プロジェクトはまだ途中ですが、ここで中間的に一つの考察を鈴木教授に書いていただきました。

トヨタ財団は1974年に設立されて以来、国内における研究助成とともに国際助成を主要な活動分野としてきた。国際助成をこれ程明確に打ち出している点で日本の多くの民間助成財団の中ではユニークといえる。加えて、国際助成の対象地域を発展途上国、特に東南アジアの諸国に絞っていることは他に類例がないといえよう。また、助成対象プロジェクト（1982年度では20件8045万円）は「固有文化の保存と振興」、「健やかで自立した青少年の育成」といったテーマをはっきり持っているものが殆どで、国際会議等への助成は少ない。このような実質的内容をもつプロジェクト助成には、財団の側に専門のプログラム・オフィサーを常設する必要が当然生じてくる。こうしたプログラム・オフィサーを中心とする助成体制を備えていることもユニークな特徴となっている。その他、一応国際助成の範疇に加えてよいと思われるものに、「隣人をよく知ろうプログラム」（東南アジア各社会の「土着の」言葉で書かれたさまざまなジャンルの作品の日本語訳出版への助成）（年間約3000万円）、地方語等の辞書編纂助成、さらには日本のさまざまなジャンルの作品を東南アジアの国語に翻訳出版する助成（これを東南アジア向け隣プロと呼んでいる）、そして東南アジア内で、相互に作品を翻訳出版する（例えばマレーシアの作品をタイ語へ）助成などがある。こうした日本と東南アジア諸国の相互理解への「文化的インフラストラクチャー」づくりを行ってきたことも日本の財団としては極めて稀である。

ところで、こうしたユニークづくめの国際助成活動も、

一朝一夕にして形成された訳ではない。設立当初で見ると助成対象地域や、助成対象プロジェクト、追求すべきテーマ、等々の点でいくつかの紆余曲折があったように思われる。つまり欧米の財団や日本の国際交流基金、日本学術振興会、文部省科学研究費助成のような助成パターンに近いものもいくつか散見できるのである。しかし、当初より独自のプログラム・オフィサーを設置し、独自のプログラムを発展させることを可能とする制度的な工夫をこらしていたことが、その後のユニークな国際助成活動を築く上で重要な意味を持ったといえる。勿論、こうした制度的な工夫をしていることは欧米の大型助成財団の場合決してめずらしいことではない。ただ、日本の民間非営利助成財団では先見的な試みであり、その点が大事なポイントである。

もう一つの大事な点は、こうした制度をフルに活用するプログラムの発展のためのいくつかの体制づくりである。例えば対象地域や、その地域の文化、社会状況への理解、さらには人間的なつながりを備えることは容易でない。これに対応してもっとも頻繁に行われているのが「支店」の設営であることは欧米の大型財団の例を引くまでもあるまい。しかし、トヨタ財団の場合、日本の民間非営利助成財団としては最大の規模であるといっても、欧米のそれに比べれば小さくそうした「支店」を持つ余裕がない。そこではむしろ「支店」をもたずに新しい方法を樹立することが必要となり、その方法を見出すためのユニークな挑戦が始められた。それは、プログラム・オフィサーが恰も「遊軍」のように各地域をくまなく訪れ、人間的なつながりのネットワークを築くという方法



東北タイの寺の僧侶を集めて、寺を子供の保育園に貸して欲しいと説明：「貧しい人々に適切な教育を提供するシステム」カウイー・トウングスプラ、コーン・ケン大学教授



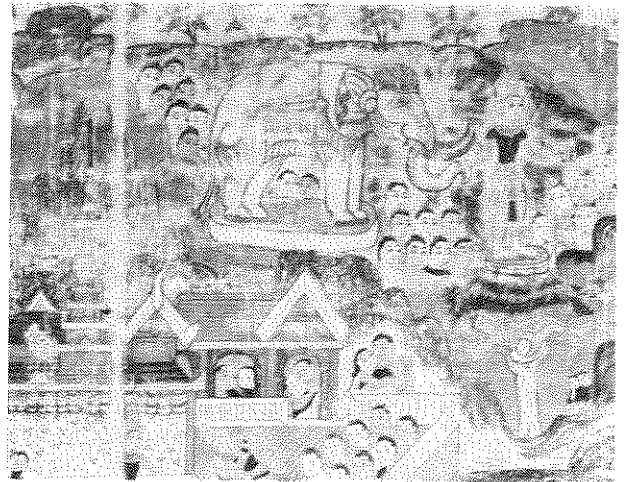
である。勿論それは、対象地域と日本の間を「地続き」にするような断えまない往復運動を伴ったことはいうまでもない。

一方、プログラム・オフィサーに対して対象地域に関する専門的な研修を別個に行わせる（例えば留学）ことも難しいため、具体的なプログラムの形成という「仕事」をこなすことと同時並行的にしかなしえない。このような制約の下では、一つ一つの助成を一つのステップとして新しいプログラムを形成していくという「積みあげ方式」がみ出されていったとしても不思議ではあるまい。このような一種の手づくりの助成活動はそれだけ長い時間を要するため、財団の理事会ならびに事務局に、独自の助成活動を築くという情熱や先見性、さらには忍耐力を求めることになる。

ところで、このようないくつかの要素を総合した形で国際助成活動が活性化してきた訳であるが、そこに今後全く問題がないということではない。

第一は、国際助成が初めから直面している難しさ、つまり、それぞれの地域社会の自己発見や自立的発展への助成には、日本的な考え方や見方、さらにはマネジメントのあり方がどこまで有効なのかという問題である。水の高きから低きに流れるといった文化の伝播ではない。むしろそれぞれの自立的発展をしんぼう強く待つという「黒子」の役割に徹することが要求されている。従って、プログラムが発展するにつれてそれだけ深い理解や社会的配慮、さらには広い意味での人間的信頼関係が必要とされる。こうした国際助成独自の要請にどう対応してゆくか。殊にプログラム・オフィサーに一つの「見識」がますます必要とされることを考えると、どんな発展的仕組（人材養成計画）を財団が内蔵すればよいのか、今後重要な課題となる。こうした難問を突破した財団が欧米のそれを含めて殆どないことを考えるにつけ、注目される。

第二は、これら東南アジアでの自立的発展の成果が徐々に各社会での各分野に新しい潮流や新しい分野、人材を輩出し、影響を与え始めている点は十分に評価しうる。それだけに、こうした各地の自立的発展を直に日本の「国益」や社会的実益に結びつけようとする短絡的な見方や考え方を改める必要もそれだけ強くなっている。つまり、問われているのは、果して日本の側がこうした各地の自立的発展を、日本の狭い意味での利害と切り離して、促



タイ北部の寺院壁画：「タイ北部の寺院壁画の研究」
ソン・シマトラン、シンラパコーン大学助教授

す役割を演じることができるかどうかという、文化の包容力なのである。それとは対照的に、以上のような自立的発展を正当に評価することも大事となつてこよう。それは近代日本が一方的に西欧文化を受け入れてきたことへの重要な反省への手がかりになるからである。国際助成が最も進んでいるタイでの、例えば寺院壁画の保存に関するプロジェクトは、タイ社会に新しい息吹きを呼び起した点で注目される。従来、こうした成果はわれわれ日本の社会では殆ど注目されてこなかった。他にも貝葉（椰子の葉に書いた古文書）の研究、地方語の辞書づくり等々国際的にみてもかなり高い評価をされてよいプロジェクトがいくつかある。ところが、最近これらの成果を日本にも紹介しようという動きが生まれてきている。新しい成果に刺激されて、これらの新しい文化を受けとめようという動きと見てよい。大いに評価すべきであろう。こうしたコンテクストでいえば、東南アジア各社会での研究成果の相互交流もまたもっと促進されてよい。

今まで述べてきたように、国際助成が始まって既に8年目を迎え、合計88件、4億5000万円強（82年度末現在。但し、「隣人をよく知ろう」プログラム等を除いた国際助成のみ）に達している。欧米の大型財団や日本の他の民間助成財団とは違ったユニークな国際助成を築きあげてきた。それが、ユニークさとともにどんな広い人間的関心を、東南アジアにおいても、そしてまた日本においても、呼びさますのか。おそらく今後のもっとも重要な点となる。



第6回国際清空会議と 第76回APCA年会に出席して

東京大学工学部 助手 柳沢幸雄

筆者と東海大学の松本秀明は、トヨタ財団の成果発表助成を得て、パリ市（フランス）及びアトランタ市（米国ジョージア州）で開催された2つの国際会議に出席し、研究助成を得て行なった「NO₂個人被曝量とその健康影響に関する研究」（代表者 西村肇）の成果の一部を発表致しましたので、これらの会議の様子を報告致します。

●第6回国際清空会議

第6回国際清空会議は、昭和58年5月16日から20日までの5日間、パリ市国際会議場で、43ヶ国、1000名以上の出席者のもとで開催されました。この会議は、大気汚染についての学際的な研究発表の場として International Union of Air Pollution Prevention Association (I.U.A.P.P.A.) によって3年毎に開かれています。会議は、10の分科会に分かれ、約300題の口答発表と、約90題の掲示発表が行なわれました。これらの研究結果の報告集は6分冊に分かれて総計2800ページ、重量約3.6kgと膨大なものでした。会議登録時にショルダーバッグに詰められたこれらの報告集を手渡されたときには、大気汚染問題に対する各国研究者の熱意がそのまま重さとなって肩にズッシリときたようでした。筆者ら（柳沢、松本）は、「大気汚染と健康」に関する分科会で、会議2日目の17日の午後、“Personal Exposure to nitrogen dioxide and its effect on human health”と題して発表致しました。これは、人が1日に吸入する大気汚染物質の量と、健康影響指標である蛋白質代謝物の排出量の関係について研究したものです。具体的には、主婦を被験者として、1) 一人一人が1日に吸う二酸化窒素(NO₂)の量及び能動・受動喫煙量と人間の構造蛋白質であるコラーゲンが代謝されて生成した尿中のヒドロキシプロリン量の間に強い相関関係が見出されたこと、2) しかし、NO₂被曝量と

第6回国際清空会議の閉会式風景



喫煙量の間には相関関係が見出されなかったこと、3) 従って、NO₂とたばこの煙の両者に共通なある性質がヒドロキシプロリンの排出量に影響を与えていることを報告しました。せきやたんなどの自覚症状ではなく、生物化学的な指標を用いて、大気汚染の健康に対する影響を論じた研究は、これまでにほとんど例がないため、聴衆の関心は高く、発表後廊下で数人の研究者と1時間程議論が続きました。

夏時間のパリは、夜9時過ぎまで太陽が照り、会議終了後町を歩くには好都合でしたが、自動車の排気ガス規制が十分に行なわれていない為か、シャンゼリゼ通りなども強い排気ガス臭がしたのには、いささか閉口しました。

●APCA年会

アトランタ市のジョージア国際会議場（アメリカ合衆国）で6月19日～24日に開催された「Air Pollution Control Association (APCA)年会」には、筆者だけが出席しました。APCAは、アメリカ、カナダを中心とした学会で、年会は研究発表、大気汚染防止関係企業の展示、教育プログラムなど多彩な内容でした。研究発表は、64のセッションに分かれ、各セッションでは6題から12題程度の発表が行なわれました。筆者が発表を行なったセッション9は、「室内汚染と健康」と題して、Harvard大学のDr. J.D. SpenglerがChairmanを務め、11題の研究発表が行なわれました。予定終了時間を1時間以上も超過する程、活発な質疑応答が繰り返されました。筆者の小学生を対象者としたNO₂被曝量と、尿中のヒドロキシプロリンの排出量に関する発表にも3件の質問が出され、慣れぬ英語で必死に応答したせいか、セッションが終了したときには、グッタリする程疲れていました。室内汚染に関するセッションでは、この他にも2つの報告があり、この問題についての関心の広がりを示していました。酸性雨については、5つのセッションで合計31題の発表がなされる程関心は高く、北米、北欧などでの影響の大きさが窺われました。

室内汚染という空間的にミクロな問題と、酸性雨のように国境を越えた空間的にマクロな問題、いわば空間的には両極端に位置するこれらの問題が今、一番強く解決を求められているとの印象を新たにして、学会場を後にしました。



第17回環境リモートセンシング 国際シンポジウムに参加して

千葉大学天然色工学研究施設教授 土屋 清

この度トヨタ財団の助成を頂き、5月9～13日、ミシガン州立大学（ミシガン州アナーバー市）で行われた表記の国際シンポジウムに参加の機会を得たのでその概要を報告する。

●シンポジウムの概要

この国際シンポジウムは、ミシガン環境研究所の主催による、リモートセンシングの分野では最古の歴史と最高の権威を持つものである。

参加者は、18ヶ国から約400人ぐらいであった。

研究発表のほかには展示会場もあり、多くの出品展示があった。

シンポジウムは総合及びポスターセッションから成り、総合セッションは招待講演で、10セッション。一般研究者の発表は、すべてポスターセッションで行われた。ポスターセッションはA～Fの6セッションで、採択された論文数は187（うち日本から16）の多きに達した。

●総合セッションとポスターセッション

総合セッションは次の10セッションから成り、1セッションについて数人の講演があり、合計42の発表があった。

①リモートセンシングに対するアメリカの国策とリモートセンシングの動向、②宇宙からの地球観測の将来、③陸海空のリモートセンシングに関する全地球的展望、④水文学的モデリングに対するリモートセンシングの貢献、⑤マイクロ計算機処理技術、⑥アレープロセッサ、⑦地球に基礎を置いた情報システム、⑧人工的情報、⑨スペースシャトル映像レーダー、⑩ランドサット4の現状。

各セッションでは、大統領府、NASA、NOAA等の直接リモートセンシング衛星に関係している責任者等から、全般的な問題に対する講演があった。

参加者にとっての最大関心事は、アメリカのリモートセンシング衛星政策、ランドサット4号の現状とスペースシャトルであったようである。特にレーガン政権になってから、小さな政府という大方針のために、ランドサット衛星を民営にする、という思い切った政策変更は、

データの価格を高騰させることになり、データ利用者にセンセーションを巻き起した。

ポスターセッションは、発表者に1.5m×2.4mぐらいのポスター用のボードが与えられ、用意して行ったポスターを張って、興味を持って周囲に来た人々に説明するという形式であった。このポスターセッションは、自分の興味を持つテーマについてだけ、直接研究者と対話できる、という利点の反面、個々の質問に対して応答するために、聞ける論文の数や、自分の研究発表について聞いて貰える数も制限されてしまう、という欠点もある。

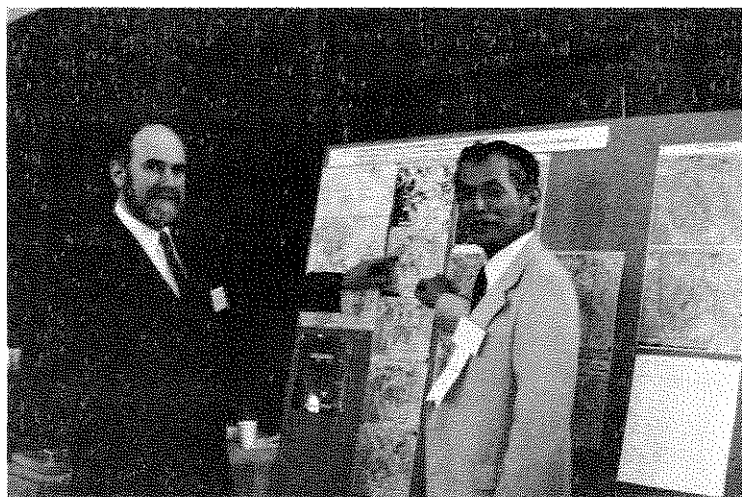
●我々の発表

我々の発表は、5月11日のセッションCで行われた。題名は「A Study on Local Natural Environments by Multi Observation」で、トヨタ財団の「身近な環境をみつめよう」研究コンクールで金賞を受賞し、その助成金で実施した研究のうち、特にランドサット衛星MSSデータの小規模気象等への応用に関する部分であった。内容がユニークであったせいか、最優秀研究に贈られるフィッシャー記念学術賞候補にノミネートされる、という光栄に浴することができた。フィッシャー記念賞が制定されてから間もないせいもあって、日本は勿論、アジアからこの賞の候補にノミネートされたのは、今回の我々の研究が最初ではないかと思われる。

アメリカの大気物理研究所でも我々と同様な研究を計画中とのことであるが、アメリカでは我々が研究コンクールでやったような小・中学生まで含めて大勢の人々を動員するようなやり方は困難なため、自動測器を配置して行うことを計画している、とのことである。

このシンポジウムを通して世界の第一線級の学者達と討論した結果、我々の研究においてもさらに観測器を追加し、航空機観測を加え、観測回数をもう少し追加すれば、まさに画期的な成果が得られることが分り、次の研究への決意を新たにして帰国した。

ポスターを前に説明を行う筆者（右）





最近の研究報告書から

当財団の助成成果の印刷については研究者からの申請によって印刷費用を助成する「成果発表助成」の制度があります。これによりまとまった報告書のうち最近出たものを下記にご紹介します。ご希望の方は、それぞれの送料分の切手を同封の上、財団レポート係にお申し込み下さい。申し込み多数の場合は先着順となりますのでご了承下さい。

II-013 高齢化と中高年からの生活設計——21世紀へのソフトランディング——(菊地幸子他, B-5 103頁 和文)

社団法人福祉社会研究所の菊地幸子所長を中心とするメンバーは、昭和55、56年度、中高年からの生活設計に関する調査研究を行った。さらに昭和57年には「中高年婦人の老後設計に関する調査」(日本小型自動車振興会からの補助金による)も実施した。本報告書は以上3ヶ年分の調査研究を総括したもので、各章末には、実証データに基づいた政策提言が盛り込まれている。(送料240円)

II-015 社会福祉研修の評価に関する研究——福祉事務所・保育所・社会福祉協議会職員に対する調査——(渡辺武男他, B-5 67頁 和文)

社会福祉従事者(福祉事務所, 社会福祉施設, 社会福祉協議会の職員)を対象に、同志社大学文学部の渡辺武男助教授を中心とするメンバーが行った、その属性ならびに現任訓練(=研修)の実態に関する調査報告書である。今後の研修のあり方にとって参考となる事例が報告されている。(送料240円)

III-017 石黒信由遺品等高樹文庫資料の総合的研究——江戸時代末期の郷紳の学問と技術の文化的社会的意義——(楠瀬勝他, B-5 141頁 和文)

富山県新湊市の高樹文庫には、幕末期の和算家石黒信由以下4代の諸資料が所蔵されている。代表者はじめ国史、地理、数学などの学際的チームが、この資料の総合的研究にとり組んだ。本報告書は、その一年目の成果の集成である。巻末には、信由が測量した地図の写真も多数収録されている。(送料350円)

III-019 技術移転の促進に係わる中国の経営管理の実態及び今後の課題に関する予備的研究 (張仁凱他, B-5 95頁 和文)

昭和56年の中国によるプラント契約破棄問題を契機に、

若手職業人の任意団体であるシステムズ・アナリスト・ソサエティーが標題のテーマにとり組んだ。本報告書はその予備研究のまとめで、対中プロジェクトにかかわった日本企業関係者へのインタビューや中国の経営管理に関する文献・資料のレビューが主な内容。(送料240円)

C-001 季節感からみた繁華街の調査研究——名古屋都心部“栄”の場合——(川本康弘他, B-5 93頁 和文)

第1回研究コンクールで研究奨励賞を受賞した「四季名古屋」チームの報告書である。都心部の季節感という難しいテーマに挑戦し、一年間を通じて隔週土曜日に調査と観察を続行し、街を訪れる人の意識や都市空間の変化を記録・分析したもので、興味をひく数々の図表やカラー写真が収録されている。(送料350円)

<編集後記>

▶ 東京大学の柳沢幸雄先生と、千葉大学の土屋清先生にそれぞれ、財団の成果発表助成をうけて行った国際学会での研究発表の報告を寄稿していただきました。両先生、ご多忙のところ誠にありがとうございました。

▶ 研究助成の選考が大詰にさしかかっております。864件という申請件数はさすがに今の事務局—選考委員会体制の処理能力の限界に近いというのが実感です。

▶ 来年度の財団設立10周年を機に、研究助成のしくみを手直しすることで、事務局がきめこまかなフォローを行う余力を確保できるようにしたいものです。

▶ 今年度の研究助成申請書の末尾でご意見などを求めたアンケート調査を行いました。ほとんどの方にご回答いただき、また有益な示唆に富むご意見も多数いただいたため、これを「昭和58年度研究助成・申請者の意見」と題する小冊子にまとめました。ご希望の方は切手240円分をそえてレポート係までお申し込み下さい。昭和54年度における同様な調査結果とあわせてお送りいたします。

トヨタ財団レポート No.23

発行日 昭和58年8月31日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 久須美雅昭

印刷 真友工芸株式会社

このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。無料です。